

1. 単元名 「みんなが安心安全に住み続けられる暮らし」

2. 単元の目標

- ・持続可能なくらしを構築するために、福祉は誰にとっても欠かすことのできないものであり、「人と人の温かい営み」や「人と人がつながり合う楽しさ」を基盤として成り立っていることに気づき、福祉に関わる人の思いや願いを理解することができる。 (知識・技能)
- ・持続可能なくらしを構築するために、福祉に関わる実社会や実生活から問いを見出し、くらしを支える福祉と、つながりや楽しさを生み出す福祉の二面性に着目しながら、多角的な視点で捉え直し、考えたことや感じたことを判断し、表現することができる。 (思考・判断・表現)
- ・人との出会いや体験活動を通して、自分ごととして福祉を捉え、仲間と関わり合いながら意欲的に学習に取り組むとともに、「みんなが安心安全に住み続けられる暮らし」について自らの言葉で発信しようとする。 (主体的に学習に取り組む態度)

3. 単元について

(1) 教材観

本教材は、福祉を通して持続可能なくらしを構築するために、①「人と人の温かい営み」が根底にあることに気づかせること、②車椅子バスケットボールを通して、「勝敗に関する楽しさ」だけでなく、誰にとっても参加できる環境を整えることで生まれる「人と人がつながり合える楽しさ」に気づかせることをねらいとした教材である。

- ① 福祉を学習する上で、「人と人の温かい営み」があることは欠かすことができない。例えば、EXPO2025 大阪・関西万博では、シャトルバス内に車いす利用者専用の乗車スペースが確保され、誰にとっても利用しやすい環境づくりが進められていることが分かる。しかし、環境を整えることだけでは、福祉の本質を捉えることはできない。福祉の根底には、「人と人の温かい営み」があるからである。身近な例として、電車内の優先座席が挙げられる。優先座席があることで、妊婦や高齢者、けがをした人などが安心して利用できる一方、仕組みが整ったことで、譲り合いや思いやりといった人と人との関わりが見えにくくなる側面もある。カテゴライズされた人のために専用の環境をつくることは、思いやりの心がなくても環境的配慮が成立してしまうという側面をもっているからである。本教材では、身近な優先座席を扱うことで、一旦立ち止まり、福祉の根底にあるものは何かを問い直し、「人と人の温かい営み」に気づかせることに価値がある。
- ② また、福祉の概念を広く捉えると、「人と人の温かい営み」を基盤とし、ユニバーサルデザインの視点で環境的なバリアを取り除く側面だけでなく、人と人がつながり合い、楽しさや喜びを生み出す側面もある。スポーツの分野では、誰にとっても参加できる環境を整えるという福祉の視点を生かすことで、「人と人がつながり合える楽しさ」を感じることができる。例えば、パラリンピックスポーツの一つである車椅子バスケットボールは、健常者・障がい者に関わらず、ルールや用具を工夫することで、誰もが参加できるスポーツである。誰もが参加できるように環境を整えることは、共生社会をめざす上で欠かすことができない。このようなスポーツに出会い、「勝敗に関する楽しさ」だけでなく、「人と人がつながり合える楽しさ」を味わえることに本教材の価値がある。福祉を、不自由さを補うためのものとしてだけでなく、誰もが楽しむためにも必要なものとして捉え直させたいと考えた。

最後に、「みんなが安心安全なくらし」を実現するために、ユニバーサルデザインの視点から環境づくりを進めていくことは欠かすことができない。しかし、限定的な視点で捉えるだけでは、持続可能

な社会の担い手として福祉を深く考えることは難しい。福祉には、「人と人の温かい営み」が側面としてあり、「人と人がつながり合える楽しさ」を生み出す側面もあるからである。そこで、ユニバーサルデザインによる環境づくりを批判的に捉え直したり、当事者との車椅子バスケットボールの体験を通して、共に活動する楽しさを味わったりすることで、福祉を多角的に捉えさせ、児童の価値観の変容を促していきたい。

(2) 児童観

本学年は、「みんなが安心安全に住み続けられる暮らし」をテーマに学習を進めている。「持続可能」をキーワードに、総合的な学習の時間で「福祉」について学んでおり、将来世代のニーズを満たしつつ、現在の世代のニーズも満たす社会の実現をめざして、世代内の公正を意識して取り組んでいる。

児童は、4年生時に「アイマスク体験」や「盲導犬に関する学習」を行っていることから、福祉について一定の知識をもっている。1学期に学習した国語科「みんなが過ごしやすいデザイン」では、校内や地域をユニバーサルデザインの視点で調べ、身近な環境づくりについて学習を進めた。導入時には、「4年生のときにユニバーサルデザインの学習をした」「アイマスク体験で校舎内を歩いた」といった発言が聞かれ、既習事項を想起しながら学習に入る姿が見られた。校内でユニバーサルデザインが活かされている場所を探す活動では、多目的トイレや昇降口のスロープなどに着目し、意欲的に調べ学習を進めていた。さらに、地域に視点を広げることで、日常生活の中にユニバーサルデザインの視点が当たり前にならされていることを再認識する実態が見られた。このような姿の背景には、4年生時の体験学習や事後学習での学びが活かされていると考えられる。ユニバーサルデザインは、特別なものではなく、日常生活の中に自然に存在し、必要不可欠なものであると捉える機会となっている。

しかし、福祉については、依然として表面的な理解にとどまっている様子が見られる。福祉を「ユニバーサルデザインの視点を生かした環境づくり」といった一側面からのみ捉える傾向が強く、「優先座席をもっとつくるべきだ」「校舎にエレベーターをつくるべきだ」といった短絡的な意見にとどまることが多い。また、福祉を社会的弱者が日常生活を送る上で欠かすことのできないものとして捉えている一方で、福祉が誰にとっても欠かすことのできない生活を支えるものであるという本質的な理解には至っていない。福祉を「特定の人のためのもの」「くらしの一場面に関わるもの」として限定的に捉えている実態があり、概念の広がりや深まりが十分でないと考えられる。

(3) 指導観

○活動全体を通した流れ

まずは、学校全体の取組として毎年行われる「赤い羽根共同募金」で導入を図り、募金されたお金の行方を辿ることで、福祉は一人一人のくらしを支えるために欠かせないものであることを捉えさせる。次に、福祉に関する環境的なものの代表例として優先座席を教材化し、「人と人の温かい営み」が素地にあることに気づかせる。そして、福祉の概念をより広げるために、パラリンピックの競技の一つである車椅子バスケットボールに出会い、誰にとっても参加できる環境づくりを整えることは「人と人がつながり合える楽しさ」を感じられることについて気づかせる。最後に、福祉に関する学習したことを保護者や同級生に発信する機会を設定することや、これまでの学びを想起させて自分の言葉でまとめさせる活動を行っていく。

○本単元で大切にしたいこと

- ① 体験活動を取り入れるとともに当事者との出会いを大切にし、体験や経験、語りを通してその人の思いや願いにふれさせることで、児童が自分ごととして捉え、考え方や価値観の変容をめざす。
- ② 「優先座席」を教材化し、福祉の根底にある「人と人の温かい営み」について気づかせるために、短絡的に答えを導き出すのではなく、一旦立ち止まってじっくりと考えさせる。

◎ 暮らしを支える福祉と「人と人がつながり合える楽しさ」を感じられる福祉の二面性に気付かせる。

① 体験活動だからこそ得られる学びを大切に、本単元では、手話体験、点字体験、車いす体験、車いすバスケットボール体験など、多様な体験活動や当事者との出会いを通して学習を進めていく。これらの体験を通して、福祉を必要とする人や福祉に関わる人の目線に立ち、能力的な評価の見方ではなく、その人の生き方や思い、願いに注目させる。

また、当事者が発する言葉や、生活経験・生育歴等の背景に基づく価値観に直接ふれることで、机上では得ることのできない学びを実感させ、自分ごととして捉える学習へとつなげていく。その際、「障がい者は大変だ」「車椅子は不便だ」といった短絡的な捉えに終止するのではなく、自分や仲間、体験活動との対話を重ねながら、一語一語の言葉を紡ぎ、自らの考えや感じたことを表現する中で、価値観の変容を促していく。

◎ 「優先座席」を教材化し、福祉の根底にある「人と人の温かい営み」に気づかせたい。そのために、電車内の優先座席の写真から導入し、次に優先座席のない車内の写真を提示して違和感を生み出す。さらに、優先座席が普及していない国の事例や現地の人の語りを手がかりに、仕組みがあることの良さと、譲り合いや思いやりが見えにくくなる側面の両方を比較・検討させる。短絡的に結論づけるのではなく、一旦立ち止まって対話しながら、多面的に捉え直す学習を通して福祉の根底を問い直させる。

◎ 福祉の二面性に気付かせることは、児童の福祉に関する概念を広げることにつながると考える。本単元では、暮らしを支える福祉と、「人と人がつながり合う楽しさ」を感じられる福祉の両面に着目させていく。その際、「大変だから助けなければならない」といった同情的・一方向的な動機にとどまらず、「すごい」「やってみたい」「楽しい」といった前向きな動機から生じる福祉の在り方にも気付かせたい。こうした学習過程を通して、福祉を多角的に捉え直し、児童の価値観の変容を促していく。

(4) ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点(見方・考え方)

公平性・・・すべての人が自分らしく安心安全に暮らすためには、同じ支えをするのではなく、一人一人の状況や困りごとに応じた支え方や環境づくりが必要である。

責任性・・・環境づくりを整えるだけで満足するのではなく、その環境がどのような思いと態度で生かすのかを自分の問題として引き受け、未来の社会の在り方に責任をもって関わろうとする。

・本学習で育てたいESDの資質・能力

クリティカルシンキング

「優先座席のよさ」を前提にしつつも、福祉が生かされた環境づくりが整うことで譲り合いや思いやりが見えにくくなる側面に着目し、一旦立ち止まって比較・検討することで、福祉の基盤を問い直す。

システムシンキング

福祉を、暮らしを支える環境づくりとしてだけでなく、人・環境・ルールとの関係を捉え直し、誰もが参加できる条件が整うことで「人と人がつながり合える楽しさ」も生まれることに気付く。

・本学習で変容を促すESDの価値観

世代内の公正・・・現世代内で、すべての人が自分らしく幸せな生活ができるように、問題を解決することができる。

・達成が期待されるSDGs

3、すべての人に健康と福祉を

10、人や国の不平等をなくそう

4. 単元の評価規準

(ア)知識及び技能	(イ)思考力・判断力・表現力等	(ウ)主体的に学習に取り組む態度
<p>① 身の回りにおける福祉を生かした環境づくりに着目し、それを手がかりに考える中で、その背景には「人と人の温かい営み」や「人と人がつながり合える楽しさ」があることを理解している。</p> <p>② 福祉に関わる人や活動(募金、体験活動、車椅子バスケットボールなど)について、聞いたことや調べたことをもとに、事実や特徴を整理している。</p>	<p>① 福祉に関わる実社会や実生活から問いを見だし、くらしを支える福祉と、つながりや楽しさを生み出す福祉の二つの側面に着目して、多角的に捉え直している。</p> <p>② 優先座席や体験活動などを手がかりに、すぐに結論を出すのではなく、一旦立ち止まって、仕組みのよさと課題の両面を比較・検討しながら、福祉の本質について考えている。</p> <p>③ 考えたことや感じたことを、言葉・文章・発表・制作物などで、相手に伝わるように工夫して表現している。</p>	<p>① 福祉に関心をもち、人との出会いや体験活動を自分ごととして受け止めながら、仲間と関わり合って意欲的に学習に取り組んでいる。</p> <p>② 「みんなが安心安全に住み続けられるくらし」について、自分なりの考えをもととし、学んだことを家庭や学校、地域に発信したり、まとめたりしている。</p>

5. 単元の指導計画(全17時間)

	時間	主な学習活動(●)	学習への支援(○) 予想される児童の反応(・)	評価(☆)
	1	● 「赤い羽根」を手掛かりに福祉について関心をもち、募金されたお金はどのように使われているか考える。	○知っていることや、調べたことをたくさん交流し、問いを設定する。 ・「赤い羽根」以外に色の種類があるみたいだよ。 ・シンボルは、「勇気」と「いい行い」みたいだよ。 ・発祥は、アメリカだったみたいだよ。 ・募金は地域の福祉活動に使われているんだって。	(ア)②
課題設定：募金されたお金は、どのように使われているのだろうか？				
	2 3	● 福祉体験を行う。①(手話体験)	○出会いを通して、話を聞いたり手話を体験したりして、福祉を必要とされる方の思いやくらしを知る。 ・電光掲示板って、音が聞こえない人にとっても必要なものなんだ。 ・テレビを映像だけで内容を理解するってすごいな。 ・字幕って、福祉の視点が含まれているんだね。	(ウ)①

	4 5	● 福祉体験を行う。◎ (点字体験)	○点字を触って読むだけの学習に終了するのではなく、点字で書かれた文章はどのように作成されているのかといった過程に気づけるようにする。 ・文章を書くときは反対から書いていたり、点字を反対に打ったりしないといけないのか。 ・点筆という道具を使って点字を打つんだ。 ・触って一瞬で点字を読めるってすごいな。	(ウ)◎
	6 7	● 福祉体験を行う。◎ (車いす体験)	○日々の暮らしにある何気ないバリアを知るとともに、介助する人の思いや心配りに気づくことができる。 ・少しの段差も車いすだと大変だね。 ・介助する人の声かけが安心感を生み出すのか。 ・「赤い羽根」のシンボルにあった「よい行い」とつながっているね。	(ウ)◎
	8	● 優先座席を題材とし、福祉の素地である「思いやり」、「温かさ」について気づかせるようにする。	○優先座席がある電車の車内の写真から導入を図ることで、福祉を身近に感じさせる ○優先座席がない電車の車内の写真を見て、違和感を持たせる。 ・今ではほとんどの電車で優先座席があるよ。 ・優先座席がないことはダメなことじゃない？ ○優先座席が普及されていない国があることを伝え、現地の人の話を聞く。 ・お互い助け合って生活しているんだ。 ・優先座席があることで、「思いやり」や「温かさ」が見えにくくなっている。	(ア)◎ (イ)◎
	9	● 「赤い羽根共同募金」を通じて、福祉に関する社会貢献をされている方と出会う。	○これまでの福祉体験は、募金されたお金で支えられていることに気づく。 ・点字体験で使った点筆は、募金されたお金で購入されているんだ。 ・災害支援のために使っているんだ。 ・福祉はつながっているんだな。 ○どのような思いで福祉活動をされ	(ウ)◎

			<p>ているのか聞き、価値観にふれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなにとって、安心安全なくらしをつくりたいと思っているんだ。学年のテーマとつながるな。 ・一人一人を取り残さない、大切したいと思っているんだ。 	
課題設定：福祉はだれのためのものだろうか？				
	10	<ul style="list-style-type: none"> ● 多角的な視点で福祉の学習を整理する。 ● 「福祉」とは何か、自分の言葉でまとめさせる。 	<p>○適宜、資料や写真を活用し、福祉は人と人をつなげ、共生社会を構築するために欠かせないものだと気づかせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・僕たちのくらしにとって福祉は欠かすことができないんだな。 ・人と人が支え合い、つながるって、温かいな。 ・一人一人のくらしを支えるものが福祉なんだね。 ・私たちにとっても、福祉って必要なんだね。 	(ア)◎
	11	<ul style="list-style-type: none"> ● パラリンピックの一つである車椅子バスケットボールに関心をもつ。 ● 車椅子バスケットボールについて調べ学習をする。 ● 課題設定を児童と共有する。 	<p>○車椅子バスケットボールに関心をもつために、動画や資料を活用する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すごい。かなり激しいスポーツだね。 ・わたしも、やってみたい。 ・気になる！詳しく調べてみたい。 ・パラリンピックスポーツなんだって。 ・激しい攻防が魅力らしいよ。 ・アメリカで世界初めての試合が行われたらしいよ。 	(ア)◎
課題設定：車椅子バスケットボールの「楽しさ」とは何だろうか。				
	12	<ul style="list-style-type: none"> ● どうしたら、みんなが楽しめるスポーツになるか考える。 	<p>○“できる、できない”ではなく、“どうすれば一緒にできるか”に意識を向けるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・車椅子を活用することで、みんなが移動できるね。 ・ゴールの高さはどうしたらいいのかな。 ・ドリブルはどうしたらみんなができそうかな。車椅子のタイヤを回した回数と 	(イ)◎

		<ul style="list-style-type: none"> ● 私たちも参加できるスポーツであるか考える。 	<p>かにする？</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 私たちも一緒に楽しむことができるスポーツであることに気づかせる。 ・ 私たちも参加できるスポーツだ! ・ やってみたい。 	
	13 14	<ul style="list-style-type: none"> ● 車いすバスケットボール日本代表に出会う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体験活動したり話を聞いたりしたりする中で、福祉を生かし、人に感動を与えるものであることに気づかせる。 ○ 車いすバスケットボール日本代表としての「福祉」について話を聞く。 	(ア)① (ウ)①
	15	<ul style="list-style-type: none"> ● 車椅子バスケットボールの体験での気づきや学びを整理する。 ● 車椅子バスケットボールの「真の楽しさ」とは何か考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 体験でしか得られない気づきや学びを感じさせる。 ・ 車椅子になりながらシュート決めることが難しかったな。 ・ シュートを決めたときに、みんなで喜び合えたことが嬉しかったな。 ・ みんなが参加できて楽しかったな。 ・ みんなが参加できて楽しむこと。 ・ 勝ち負けだけでなく、一緒に楽しむこと。 	(イ)①
	16 17 18	<ul style="list-style-type: none"> ● 福祉の学びを発信するための準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 発信の方法は児童一人一人に考えさせ、自分にあった発信方法を選択させる。(発表型、制作物、体験型等) ・ 僕は福祉体験コーナーを使って、お家の人と一緒に考えたいな。 ・ 私は福祉の学びを伝えたいから、スライドを使って発表しようかな。 ・ ポスターをつかって、会場に掲示し、待ち時間に見てほしいな。 	(ウ)①
	19	<ul style="list-style-type: none"> ● 福祉の学びを発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業参観で体育館に会場を設営し、児童や保護者、これまでの出前授業の先生らがみんなで共に学び合える仕組みを整える。 ・ 僕は、Aさんの発表を聞いてみたいな。 ・ B先生は、どう感じましたか。私は、誰かのために必要なものではなくて、みんなのくらしを支えるために必要だと思いました。 ・ 福祉を生かし、仕組みを整えること 	(ウ)①

			でみんなが参加できるスポーツになるね。	
	20	● これまでの学びをまとめる。	○ これまでの福祉の学習で学んだことをまとめる。 ・福祉はくらしを支える上で欠かすことができない。 ・福祉の考え方ってスポーツでも生かされているんだね。 ・「人と人の温かさ」は忘れてはいけないね。	(ウ)◎

【成果と課題】

本単元において、成果と課題をふり返りつつ、次につながる実践へと応用できるように考察していきたい。福祉の側面から、「みんなが安心安全に住み続けられるくらし」を軸として据え、くらしを支える福祉とつながりや楽しさを生み出す福祉の二面性に着目させることで多角的な見方・考え方で捉えることができたのか記述していく。

まず、成果について記述していく。主に3つあったと考える。◎ 体験活動や当事者との出会いが、自分ごととして捉えることにつながり、価値観の変容につながった。◎ 自作教材「優先座席」を教材化したことで、くらしを支える福祉の一側面である「人と人の温かい営み」に気付かせ、環境的な福祉を批判的に捉えさせることができた。◎ 福祉の概念をより広く捉えさせるために、くらしを支える福祉だけでなく、つながりや楽しさを生み出す福祉に関しても教材化できると示唆できた。

◎ についてである。特に、体験でしか学ぶことができないことや当事者に出会わなければ分からないことを感じ取らせることができた。例えば、点字の体験である。児童にとって、点字を触れてみたり読んだりする経験は実生活の中で多いように感じる。しかし、実際に点筆を使って点字を書く経験は少ない。点字学習において、新たな側面に気づくことは考え方の変容につながり、点字を通して福祉を身近に意識づけることができた。また手話体験では、耳に社会的ハンディキャップを抱える人と出会うことで、実際に手話を使ってコミュニケーションを図ることができた。手話を使ったニュースで手話のことを知っていることや学習の一環として学ぶ機会があったとしても表面的な理解に終止していた。しかし、実際に当事者とコミュニケーションを図ることができたことは、児童にとって特別な経験となり、手話をより身近に感じさせ、「手話は一つのコミュニケーション手段である」と見方や考え方を変容することができた。

◎ についてである。「優先座席」を批判的に考えさせたことが効果的だったと考える。児童の生活経験を通して、優先座席は存在することが当たり前になっている。そのような生活環境の中で、批判的に考えさせ、「人と人の温かい営み」に気付かせたことは、環境的な福祉と「人と人の温かい営み」に関する福祉の二面性を捉えさせることができた。さらに、福祉を一側面だけでなく多角的に捉えさせたことが効果的だったと考えている。自分たちのくらしに学びを転移させるためには、構造的理解を生じさせる授業構成が必要である。児童が4年生のときに学習したユニバーサルデザインデザインに関する福祉学習に留まらず、自作教材「優先座席」を通して「人と人の温かい営み」に気付かせたことは見方や考え方を広げるだけでなく、実生活に学びを生かすことができる授業構成を考えることができた。

◎ についてである。ここでは、日程的な関係のため実践がまだ出来ていない。そこで、授業プロセスについて考えていくと同時に児童の生活的概念と関わらせながら考察していく。つながりや楽しさを生み出す福祉について、スポーツと関わらせたことが効果的だと考えている。児童にとってスポーツは身近な存在である。生活背景を考慮して、実践へとつなげたことは効果的な取組になると期待する。また、効果的な指導を行うために児童の生活的概念を意識しつつ、くらしを支える福祉とつながりや楽しさを生み出す福祉に通じた本質的な考え方である「一人一人が参加できる共生社会

の構築」に気付かせたい。共生社会は持続可能な社会を構築するためには欠かすことができない。表面的な理解に留まらず、本質的な考えまで深く迫っていきたいと考える。

次に課題である。1つ挙げる。これまでの学びをふりかえるための環境的な仕組みづくりができなかった。本実践は、年間を通した取組である。児童によっては、既習事項であることに関わらず、「忘れてしまった」と発言する児童がいた。授業の実践内容に関わらず、学びを記録するためのポートフォリオや教室掲示をする模造紙等、児童がいつでも学びを感じたらせる仕組みづくりを進める必要があった。

最後に、今後に向けてである。大事にしたいことは、実践と理論の往還である。今回は福祉の実践であったが教材研究を重ねて明らかになる本質的なところは領域・教科で応用できるのではないかと考える。特に ESD となれば、よりグローバルな視点となる。そこで、例えば、学習科学の分野の理論を学び、実践と理論を往還することで、児童の深い学びに向けた授業プロセスが明確になると考える。今後は実践と理論を往還させ教材研究を重ねることで、さらに深い ESD 実践へとつなげていきたい。



現在の学年終了時に目指す姿

福祉の視点から「みんなが安心安全に住み続けられる暮らし」とは、人と人のあたたかい関わりが根底にあることに気づき、福祉は誰にとっても欠かすことができないものだと発信することができる。

国語「みんなが使いやすいデザイン」

校内にあるユニバーサルデザインを生かした環境づくりを調べることによって、身近なところにたくさんあることに気づき、「福祉」について関心をもつことができる。また、ユニバーサルデザインは社会的に注目されていることに気づかせ、福祉学習のきっかけ

総合「福祉体験活動」

「手話体験」、「点字体験」、「車椅子体験」の福祉体験を行う。体験でしか得られない学びを感じとる。福祉体験は、募金によって成り立っている体験活動であり、この後の「赤い羽根共同募金」の出前授業において、学びを深める手がかりにする。

総合「赤い羽根共同募金」の出前授業

身近にある「赤い羽根」を教材に扱うことで福祉をより近いものだと感じさせる。また、募金をしたお金の行方を辿ることで、「募金をする人」、「募金を生かす人」、「福祉を必要とする人」の3つの立場に気づかせ、つながり合って、支え合う関係であることを捉える。

ユニバーサルデザインって聞いたことがある。自分たちの身近にたくさんあるな。

「人と人の温かいさ」は欠かすことができないね。

「福祉」は暮らしだけではないね。スポーツにも福祉の視点があるんだね。

総合「みんなが安心安全に住み続けられる暮らし」

○主に養いたい ESD の資質・能力
クリティカルシンキング

「優先座席のよさ」を前提にしつつも、福祉が生かされた環境づくりが整うことで譲り合いや思いやりが見えにくくなる側面に着目し、一旦立ち止まって比較・検討することで、福祉の基盤を問い直す。

システムシンキング

福祉を、暮らしを支える環境づくりとしてだけでなく、人・環境・ルール の関係を捉え直し、誰もが参加できる条件が整うことで「人と人がつながり合える楽しさ」も生まれることに気付く。

○主に育てたい ESD の価値観
世代内の公正

現世代内で、すべての人が自分らしく幸せな生活ができるように、問題を解決することができる。

点字を打つ機械のことを点筆というんだね。

これまでの福祉の学びを整理してみよう。事実が出前授業や体験活動になるのかな。

出前授業は福祉に関わるんだね。私たちも福祉を使っていたんだね。

道徳 自作教材「優先座席」

「優先座席」を教材として扱うことで、「人と人の温かさ」に気づかせることができると考えた。日本では当たり前になっている優先座席であるが、海外に視点を移すと優先座席がなくても社会は成り立っている。一旦立ち止まって、じっくり考えさせたい。

総合「車椅子バスケットボール」の出前授業

福祉を多角的な視点で捉えさせることができる。一人一人の暮らしを支えるための福祉だけでなく、スポーツを通して仕組みを整え、みんなで楽しむことができる側面に気づかせる。多角的な側面に気づかせることによって、福祉の見方や考え方がより豊かになる。

国語「子ども未来科」で何をする

本単元は文章の構成を整え、説得力のある提案をすることがねらいである。これまでの福祉の学習を整理し、発信するための準備として位置付けたい。文章を構成する過程を通して、意見や根拠、事実を明確に使い分け、説得力のある文章で伝えさせていく。